

「正信偈」について（第七回）

正信偈の教え上 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による
のうほ いちねんきあいしん

能発一念喜愛心

よく一念喜愛の心を発すれば、

ふだんぼんのう とくねはん

不断煩惱得涅槃

煩惱を断ぜずして涅槃を得る
なり。

ぼんしょうぎやくほうさいえにゆう

凡聖逆謗齊回入

凡聖、逆謗、ひとしく回入すれ
ば、

によしゆしいにゆうかいいちみ

如衆水入海一味

衆水、海に入りて一味なるが
ごとし。

しゆうすい

〔意訳〕

信じ、喜び、愛する心が、ひとたびおこる時、煩惱をなくさない
ままで涅槃のさとりが得られるのです。

凡人も、聖者も、逆らう人も、けなす人も、ひとたび心を回せ
ば、みなひとしく救われるので、あたかも、あらゆる川の水も、
海に入れば同じ味になるようなものです。

ひるがえ

この句の前に「五濁悪時群生海 応信如来如实言」つまり現在のよ
うな五濁の悪時に生きる我々は、如来の事実の通りのお言葉、つまり
釈尊が説かれた真実、阿弥陀仏の本願の教えを信ずるべきであると、
親鸞聖人はおしえられました。

そこに続く言葉として、「能発」（よく発す）^{ほっ}というのは、文字通りには、起こすことができるという意味ですが、私どもが自分で（喜愛の心を）起こすことができる、というのではないでしょう。それは、阿

弥陀仏の願いによって、その願われた通りに、(喜愛の心が)私どもの心のなかにわき起こるということを意味するのです。

さきに「応信如来如実言」(如来如実の言を信ずべし)と詠ってありました。この流れからしますと、「信」がもとになって「喜愛」があるわけです。しかし親鸞聖人が教えられる「信」は、私どもが自分の意志で起こすものではありません。阿弥陀仏の本願の力によって私どもに信心が生じ、その信心によって歡喜の心がおこされるのです。

『仏説無量寿經』には、「南無阿弥陀仏」という名号によって「信心歡喜」があると教えられています。しかも「信心」と「歡喜」とが一つのこ

ととして説かれています。

私どもは、自我のはからいを捨てることがなかなかできません。けれども、はからいを少し横に置くことによって、阿弥陀仏の本願に素直になれると教えられています。そして、仏の願いに素直になる信心によって、喜愛の心が起こされるのだと諭されています。

さらに、喜愛の心が起こされることによって、煩惱をなくさないまま、煩惱の支配を離れた涅槃という境地にいたることができると詠われているのです。

煩惱にまみれ続けている凡夫であろうと、煩惱を滅し尽くした清らかな聖者であろうと、又、たとえ五逆というような重い罪を犯すひとであろうと、さらには、仏法を誇るような人であろうと、いずれも自分本位という真実に背を向ける心を、大きく翻ひるがえして、真実に目覚め、本願を喜べるようになるならば、阿弥陀仏の願いによる救いにあずかることになる、親鸞聖人は教えておられるのです。

それはちょうど、どこから流れてきた川の水であろうと、又途中でどのような所を流れ下ってくるのか、そのたどってくる場所や状況が違っても、海に注ぎ込めば、みな同じ塩味になるようなものだと教えておられるわけです。